

地域の活性化と図書館 —矢祭もったいない図書館に着目して—

博士後期課程 1 年 教育基礎学専攻

賈 燕 妮

1. はじめに

福島県の最南端の山間にある人口 7 千人の小さな自治体である矢祭町は少子高齢化の問題を抱えており、財政も厳しい状況にある。このような「矢祭町は、平成 13 年 10 月 31 日、平成の大合併の波が押し寄せる前夜、全国に先駆けて『市町村合併しない矢祭町宣言』を行った」¹。それをきっかけに全国に名を響かせた。その後、自立の町づくりを目指す矢祭町は行財政改革を行ってきた。2007 年 1 月に財政の厳しい矢祭町には全国の寄贈図書により、もったいない図書館が開館され、もう一度全国から注目を浴びた。山本順一は「地味な『図書館』を図々しく地域振興の道具として活用した町当局の姿勢にも学ぶところは大きい」と評価した²。図書館が矢祭地域にとって、どんな役割をもつのかを明らかにしたい。

2. 矢祭もったいない図書館の特徴

矢祭町では、2005 年に町民へのアンケート調査の結果「図書館がほしい」という住民の要望が多数寄せられた。2006 年 7 月に、武道館を地域開放型交流施設として改築、「新しい図書館づくり」が着工された。「もったいない運動キャンペーン」の一環として、図書の寄贈を提案したことが毎日新聞全国版に掲載さ

れ、全国から本が殺到した。その後、町の公募で 43 人の図書館開設準備委員会が発足した。山村開発センターで寄贈本の分類作業を素人集団で実施した。商工会、各種団体、役場職員、PTA、婦人会、青年部など 191 人が分類作業の応援にボランティアで参加した³。2007 年 1 月に矢祭もったいない図書館開館。10 月に全国に向けて「読書の町矢祭宣言」を宣言し、公民館及び町内集会施設 26 ヶ所に矢祭もったいない文庫を設置した。2009 年 5 月に文部科学省から「子ども読書の街づくり」の指定を受け、「矢祭町子ども読書の街づくり推進委員会」を組織した。もったいない図書館を核として、町行政・学校関係者・PTA 関係者・ボランティアの方々と町をあげての読書運動を展開している⁴。

上述した矢祭もったいない図書館の活動の発端とこれまでの主な活動をみると、地域住民との深い関わりが確認できる。矢祭もったいない図書館の設置のきっかけは住民のニーズであり、寄贈本の分類も草の根である住民ボランティアで実施した。開館後、矢祭行政サポーターが組織され、ボランティアは運営業務を担当している。矢祭もったいない図書館は地域住民の自分たちの手でつくり、運営しているといえよう。これは矢祭もったいない図書館の特徴だと思う。

3. 地域の活性化に関する図書館の可能性

地方公共団体の財政難に伴い、予算と職員の削減を急速に進めているが、その一方で住民の学習ニーズは高まり、自己教育を支える社会教育機関としての図書館の果たす役割は高まっている⁵。町内に書店もない矢祭町は住民の学習ニーズに応じて、資料購入費ゼロで図書館をつくってきた。蔵書は寄贈本であるが、児童書から郷土資料、医学書まで、あらゆる分野の本が並ぶ。図書館ができることは書店もない地域住民に各種の資料や情報を提供している。住民学習の客観的な条件が整ったと考えられる。

各町内集会施設に文庫を設置することは、家族みんなで同じ本を読むということにより家族を始め、地域住民全体の読書習慣をつくることが期待され、地域の読書を中心とした社会教育活動を支えている。また、子ども読書の街づくり運動は地域文化を促進し、住民交流を促すことで、地域を活性化する可能性を引き出せると考える。

このような様々な図書館活動を通じて、住民学習によって住民の力量形成に寄与することは、社会教育施設である図書館の存在意義を明らかにした。

4. おわりに

矢祭町以外、「図書がほしい」という自治体ほかにある。矢祭もったいない図書館は初期の目標であった40万冊に達した時期、図書を寄贈する方に受入辞退を説明し、ほかの蔵書を募集しているところを紹介したら、矢祭もったいない図書館にしか寄贈したくないという寄贈者は少なくなかった⁶。矢祭もったいない図書館の事例は同じ問題を抱えている自治体に簡単に適用できるとは考えられない。

マスコミの影響や全国から合併しないことを宣言した矢祭町への賛同、職員の努力などの要素も看過できない。

矢祭もったいない図書館の活動を通じて矢祭地域を活性化し、地域づくりを推進することが期待される一方で、不十分なところもある。

第一に、力量がある職員の育成と研修。現在運営業務を担当している14名のボランティアのうち司書の資格を持っているのは1人だけである。住民の情報活用能力の向上を支援し、事業の企画立案に関する能力がある専門職員が求められている。

第二に、安定的な財政基盤。館長へのインタビューによると、今まで一冊の本も買っていない状況である。しかし、住民の力量形成に関する資料や地元に関する出版物など必要な本を買う財源を確保しないと、図書館の学習機会を提供する機能が活用できないと考える。

【注】

¹ 『矢祭町自治基本条例』、平成17年12月。

² 山本順一「自治体の経営戦略と図書館の在り方」図書館問題研究会編『図書館評論48号』、2007年7月。

³ <http://www.pref.fukushima.jp/jinji/omg/bunschool/PDF/kennan01.pdf> 2010年3月31日にアクセス。

⁴ 『矢祭もったいない図書館』、矢祭調査(2010年2月16日)で矢祭もったいない図書館にていただいた資料。

⁵ 日本公民館学会編『公民館コミュニティ施設ハンドブック』エイデル研究所、2006年、p.287。

⁶ 2010年2月16日に矢祭もったいない図書館の館長金澤昭氏へのインタビューより。